

水稻密播移植の精度向上に向けた取組（世羅町）

【平成30年5月22日掲載】

5月9日、世羅町の（農）さわやか田打（代表理事 岡田以得（おかだ いとく）、組合員 58名）で、水稻密播移植栽培における移植精度向上に向けた実証を行いました。

密播移植栽培とは、慣行の1.5～2倍量の種子を育苗箱に播種することにより、10a当たりの使用育苗箱数を削減する省力・コスト低減技術です。しかし、この技術は慣行の移植栽培に比べて、移植時の苗のかき取り面積が小さく、「重りの役目を果たす根鉢の培土量が少ないこと」、また「苗かき取時に培土が崩れやすいこと」から浮き苗や転び苗などが発生し、移植精度の向上が課題となっていました。

今回の実証では、粘性が高く苗かき取時に根鉢が崩れにくいことが想定される赤土系の培土と法人が従前から利用している黒ボク系の培土で育苗した苗を用いて、培土の種類による移植精度の差異について検証を行いました。結果は、赤土系の培土の方が移植精度が向上（3～6本/株植の比率・欠株率 赤土系：76.3%・0.6%、黒ボク系：65.0%・0.8%）することがわかりました。

法人関係者からは「赤土系培土は水分が多く育苗箱が重くなるが、根張りは極めて良好で、粘性が高いため培土が崩れにくく、育苗箱への培土の残存が少ないので洗浄も楽になりそう」と副次的効果を歓迎する声も聞かれました。移植時の根鉢の崩壊には、培土の種類に加え、培土の含水率が大きく関与しているものと想定されるため、当所では、本技術の普及定着の鍵となる移植精度の向上に向け「培土の選択」や「移植時の培土の水分」などについて取組経営体への注意喚起を行うことにしています。



赤土系培土の育苗苗



黒ボク系培土の育苗苗



実証ほの田植え風景

情報提供元

東部農業技術指導所